





つた報道をしている例を挙げましよう。

つい先日、東京都大田区の区議会で、ある議員が少子高齢化問題の中で、少数性的嗜好者を法律で保護する必要はないと思う、という主旨の発言をした際、ワイドショーでは挙つてこの発言を「差別、時代錯誤だ」とやり玉に挙げていました。「もし仮に世の中の人々全てが同性愛者になつてしまつたら、人類が終わつてしまう。」という発言です。

これは、自然界では、雌雄同体の性質を持つ生物以外、ごく当たり前の事を言っているのです。

コロナ禍にしても、少子高齢化にしても、国家の将来、国民の健康、民族存亡に関わる重要な事柄で、今の日本の状況は、正に国難とも云える状況です。

そういった国難に立ち向



祭主に先立ち 教父様、玉串奉奠

「輪臺」特別の兜を被り、副権現職夫人・多恵子様、本木裕子さん、西田清美さん、藏樂貴子さんが奉舞。



かうとき、先人たちは、自分のことはさておき、国家との信頼を更に強固なものにして乗り越えてきました。

しかし、今年の夏のコロナ禍では、世論も、大方のメディアも、政府に我々の生命を守ってくれといったり、一旦感染が収束し、経済の悪化が表に出れば、政府の対応を非難し、給付金や支援金を出せという。

せん。一例を挙げるとすれば、特殊詐欺、所謂、オレオレ詐欺の被害が一向に減らないのも、そう云つた社会の表れかも知れません。

善良な皆様でしたらおおよそ考えもつかない、身体的にも弱者であるご老人方がこれまでコツコツ貯めてきた大切な老後の資金を、言葉巧みに騙し取ることを、平気でやる若者が思いがけず多く存在し、そんな彼らはそう云つた詐欺行為すら仕事と呼ぶのだそうです。

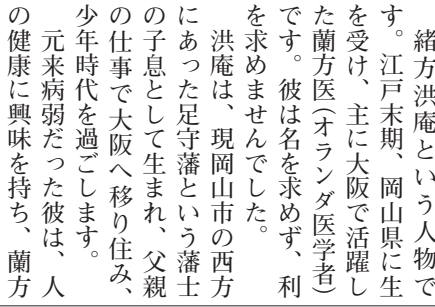
仕事というものの本質を学ばずに大人になる若者が多いのかも知れません。

最後に、「仕事」というものの、美しくも素晴らしい本質を、その一生をを通して、世の為に尽くすことに貫いた歴史上の偉人を紹介致します。

緒方洪庵という人物です。江戸末期、岡山県に生を受け、主に大阪で活躍した蘭方医(オランダ医学者)です。彼は名を求めず、利を求めませんでした。

洪庵は、現岡山市の西方にあった足守藩という藩士の子息として生まれ、父親の仕事で大阪へ移り住み、少年時代を過ごします。

元來病弱だった彼は、人の健康に興味を持ち、蘭方



祭典開式、一同着座拝。

医学を学び、江戸、次いで長崎で坪井信道などに学び、二十九歳で大阪へ戻り、医者として活躍する傍ら、私塾「適塾」を開き、後進の育成にも努めました。

適塾の卒業生たちの多くは、明治時代、日本の近代化に大きく貢献しました。

その中でも有名な人物は、大日本帝国陸軍創始者といわれる大村益次郎や、慶応義塾大学創始者の福沢諭吉などです。その適塾の建物は、大阪市中央区北浜に今でも残っています。

洪庵は晩年、幕府より、江戸にて將軍専属の医師になるよう命ぜられますが、断り続けます。

しかし、幕府からの再三の出向命令を無視することもあるはず、五十三歳の時に江戸へ出向きますが、翌年あつてなく亡くなつてしま

いました。そんな洪庵は、常に自分に戒めていたそうです。「医者がこの世で生活しているのは、人の為であつて、自分の為ではない。決して有名になろうと思つた。利益を追おうとするな。自分を捨てて、人を救うことだけを考えよ。」

仕事とは己の利益の為だけにするのではなく、人の為、世の為、社会の為に資する事が目的で、それに対する対価を頂くという本質を体現されたのが、緒方洪庵という人物なのです。

世には様々な事柄や事象が起きますし、時代はどんどん移ろいます。

しかし、私達人間の本質日本人の本質は、どんなに時代が変わつても、どんな困難に立ち向かおうとも、変わりませんし、変えてはいけないことなのです。

その本質とは何なのか。それは、神の御心、そのものです。

神の御心に沿つて、今ある生命を精一杯生きて、仕事に従事し、自家成立繁栄を願う。そして頂いたお蔭、お蔭を世の為、人の為、教えの為に返して、次の世代へバトンを繋ぐ。

これが、いつの時代も変わらない、日本人の美しさ、日本人の本質ではないでしょうか。

教信徒皆様が大神様、御教祖様、各家御祖先様方の守護の息吹に守られて、更にそれぞれが心豊かに日々を過ごされるよう、心より祈念申し上げます。

十月は「神無月」と申します。由来は諸説ありますが、神様が居られない月という意味ではありません。

古文で「な」は接続詞で、現代文の「の」と同じ意味です。つまり「神の月」に漢字をあてたといわれております。

十月は実りの秋とも云われる様に、稲穂をはじめ、様々な作物の収穫の時期です。そして我々大和民族は農耕民族です。神様からの恵みである稲穂を収穫できることに感謝し、神様と共に喜びをかみしめる月、という意味がございます。

扱、本日は祖国の「防衛」について考えてみたいと思

九月三十日の産経新聞に

静岡大学教授で文化人類学者の楊海英氏が、ある寄稿をされました。

最後にになりましたが、総代始め参事、地区世話人、婦人世話人、青年部、宝寿会、又有志の皆様、台風接近の中で、数日間の熱意溢れるご奉仕のおかげで、本日の大祭が滞りなく肅行出来ました事を御礼申し上げます。本日の挨拶と致します。有り難う御座居ました。

楊氏はモンゴル出身なのですが、実はモンゴルという国は大変数奇な運命を辿る国なのです。

私達の祖国日本は、大東亜戦争で残念ながら敗戦致しました。方や、日本がその一部を植民地化するなど、戦前から関与していたモンゴルという国は、中国と共に戦つておりましたので、実は戦勝国なのです。

敗戦国である日本は、一度は焦土と化しましたが、経済成長を経て、現在恵まれた生活を送ることができ

世界的に見ても先進国に数えられます。

一方で、戦勝国モンゴルは現在、大変難しい状況に

あるそうなのです。「戦後七十五年も過ぎたというのに、敗戦国の日本はいまだに戦争の呪縛から解かれていない。

ここでいう呪縛とは二つある。一つは、いかなる戦争も絶対悪だという偏った見方が根強く残っていることと、これがために日本人の思想的源泉は枯渇してしまつて



大祭直会。森末悦楽さん「峨眉山月」①、岸田梯子さん、白井京子さん「千本桜」②、青年部役員紹介③と、盛り上がり好例のおさがり福当りの抽選が行なわれた。

その課程で、戦いに歯止めをかけようとして、様々な思想が生みだされた。近代以降に出現したのが、正義と非正義の戦争観だ

大戦後も事あるごとに戦争で以て、紛争や非正義なる存在を処理してきた。

もう一つは、現実離れした非武装論がはびこり、そのため日本は国家としての国際的立場を悪くしていることだ。

われわれ人類、ホモサピエンスという種は誕生してからずっと戦争をしてきた。

先に形成し、定着していった集落を襲い、征服し、自

らの領土と財産にしていったのが、ホモサピエンスの地球占拠史である。

その課程で、戦いに歯止めをかけようとして、様々な思想が生みだされた。近代以降に出現したのが、正義と非正義の戦争観だ

二十世紀に勃発した二度にわたる大戦を、人類は正義と非正義の価値観で戦後処理した。

正義の戦争観を打ち立てた西洋諸国も、苦渋の心情で植民地の独立を受け入れざるを得なかったのではな

い。戦争は資本主義の悪で、社会主義国家はそれを行使しないという神話もあつた。しかし、一九七九年、中国とベトナムが社会主義国家同士で戦火を交えて、その神話を粉砕した。

領国の背後にはそれぞれ、資本主義国家アメリカ

と社会主義国家ソ連もいたので、イデオロギー(思想)による正義と非正義の区別は無意味だと証明された。

これらの歴史を見れば、日本だけが非正義の戦争を起し、「侵略」された側にすべての正義があるという見方は成立しない。

実は、日本の「戦争絶対悪」論という呪縛は、即ち正義対非正義の戦争観を敗戦国として受け入れた結果に過ぎないのだが、それが徹底的非武装論という次なる呪縛の温床となつた。

敵に侵略されても、隣人が強化しても、丸腰で対応しようという天真爛漫な空想論。

敵が隣入してきて、強盗の隣人が暴力を振るつた後に何が生じるかを想定しようとしな

「戦勝国のモンゴルは日